

第1章 - ラリーオビディエンス

Modified 8/15/2019_SCT3.4 Level 2 Bonus Exercise

ワールドサイノスポーツラリーは、人と犬が共に楽しめるスポーツ活動として、ラリーオビディエンスを推進しています。

このドッグスポーツの本質は、コース上に置かれたトレーニングエクササイズを、設けられた制限時間内にハンドラーと犬がコミュニケーションをとりながら楽しむ事にあります。様々なエクササイズ(課目)に取り組むことで、常に新鮮な気分トレーニングすることが可能になり、それが犬とハンドラーとの関係をいい状態に保つことに繋がります。

ラリーオビディエンスでは、作業に対してポジティブな意識が求められるため、パフォーマンス中に犬を誉めることや、トリーツの使用を認める特別なルールが設けられています。

セクション 1.1-参加資格

規定により、月齢 6 ヶ月を越えた MIX ブリードを含む全ての犬の所有者は、WCRL 公認または WCRL イベントに参加することが出来る。各クラスの参加条件は、第 2 章のクラス構成に記載。

参加資格を得るには、競技者は WCRL の公式規則を遵守し、以下に同意しなければならない。

- 修了証、ナショナルランキング、順位、表彰を受ける為に、WCRL または USDAA にて犬の登録をしなければならない。登録は、WCRL サイト rallydogs.com < Caution-http://rallydogs.com > にて登録、または OPDES 公式登録フォームに必要事項を記載の上、所定の登録料を添えてイベント事務局に提出する。
- 発情犬は大会事務局の案内書に条件が明記されない限り、通常参加することはできない。
- ハンドラーとして全てのタイトリングクラスに参加できるのは、登録犬の所有者、その肉親、または配偶者、ライフパートナー、祖父母、あるいは孫であることが条件である。事務局によって特別に設けられたノンタイトリングクラス(スペシャリティクラス)の場合、この規制を設けないこともある。
- 痛みを伴わない身体障害であっても、出場に伴い痛みを生じる可能性のある犬の参加は認められない。(年齢および年齢関連疾患は一般的に障害とはみなされない^{1,1)})
- 痛みの徴候を示す犬は棄権・失格とする。
- 医療処置の包帯、テープ、または縫合糸が付いている場合は参加できない。

さらに

- ジュニアハンドラー(1 月 1 日時に 16 歳に達していない)は、登録した犬と全てのクラスに参加できる。^{1,2)}
- セクション 1.2 の規定により、ハンデキャップのあるハンドラーでも WCRL イベントに参加することができる。
- 処分保留、または懲戒処分を受けているハンドラーまたは犬は参加することができない。

また、ハンドラーはイベント参加申込に伴い、その案内書に記載される基本契約、条件、懲戒処分の手続き、WCRL 規則等を理解、承諾し、従わなければならない。

WCRL は必要に応じて、例外、解説、明確化、追加事項等を随時更新する。

声明文、規定、大会の案内等は rallydogs.com にて入手することができる。

ハンドラーまたは犬が抱えるハンディキャップにより、エクササイズを記述通りに実行することが不可能な場合、ハンドラーは事務局から変更申請書(RFM)を入手し、書面にどのように、コースまたはエクササイズを変更して実行するかを提出しなければならない。
書面は各クラスの開始前に審査員に提出しなければならず、変更内容は、出来るだけ本来の形に近いものでなければならない。

審査員は状況に応じて、ハンドラー、もしくはその犬が抱える身体障害でも実行可能なエクササイズ内容、またはコースレイアウトに変更しても良い。変更内容の申請を受理するか否かの最終決定は審査員が下す。

障害者または障害犬を含む全ての WCRL 参加者は、最新版のルールとガイドラインによって審査される。

ハンディキャップによる変更依頼は、審査に寛容さを求めるものであってはならない。

障害者、または障害犬のチームは動きが制限されるため、そのクラスのリミットタイムをそのペアの標準タイム^{1.3)}として適用する。

ただしリミットタイムを超えるタイムを標準タイムとして設定することはできない。

WRCL はこれらの規定を必要に応じて変更し、変更があった場合は rally.com オンラインにて公表する。

脚注:

- 1.1 高齢による傷害、病気または衰弱性疾患は、これに該当しない。
犬が痛みをうったえるものは身体障害とはみなされず、参加することは出来ない。
犬の健康と安全を最優先する。
- 1.2 ジュニアハンドラーによって登録された犬は、そのハンドラーと参加しなくてはならない。登録者が 16 歳に達した際に、登録犬は自動的にレギュラークラスに再登録される。
- 1.3 標準タイム(SCT)およびタイムペナルティの起用は、2018 年 11 月 13 日をもって、無期限で延期となる。

第 2 章 – クラス構成

この章では各クラスについて解説する。
クラスは下記の 3 つに分かれる。

- レギュラークラス
- 特別クラス(カスタマイズ-例:オーナー以外のハンドリング、ジュニアクラスなど。)
- トーナメントクラス(ナショナル・インターナショナル)

パフォーマンス(演技)の採点方法は、第 3 章から第 4 章に記載。各エクササイズ(課目)の実施要項は第 5 章から第 7 章に記載。

セクション 2.1 – レギュラークラス

レギュラークラスは、下記のレベルごとに難易度が増していく。

イントロ^{2.1)} – リード付き (ジャッジ 1 名可)

ヒーリング(脚側行進)、Sit(停座)、Stand(立止)、Down(伏臥)、Front(正面停座)、フィニッシュの基本動作を、コース全体を通してスムーズに行うことに重点を置いたクラス。

オビディエンスの基礎訓練を習得したばかりの人達に、ラリースポーツの楽しさを知って貰うことを目的としている。

イントロクラスではボーナス^{2.2)}を含む 10 個のエクササイズが使用される。

レベル 1 – リード付き

ハンドラーと犬の絆を構築することを目的とした基本動作を、チームとしてスムーズに行うことに重点を置いたクラス。

ヒーリングにおける屈折、Sit、Stand、Down、Front、フィニッシュなどの基本動作の熟練度ををはかるため、コースには適度な長さが設けられている。

レベル 1 のコースでは、ボーナス^{2.2)}を含む 14~16 個のエクササイズが使用される。

レベル 2 – リードなし

ノーリードの状態、犬がハンドラーとの作業に対して自信をもって実行することに重点を置いたクラス。

次のレベルに進むために必要な遠隔作業やコントロール能力をはかるため、コースには適度な長さが設けられている。

レベル 2 のコースでは、ボーナス^{2.2)}を含む 16~18 個のエクササイズが使用される。

レベル 3 – リードなし

スタートからフィニッシュまで一連の動作の中で、チームとしてハンドラーと犬の意思の疎通がとれているかに重点を置いたクラス。

このクラスでは犬の態度、反応、遠隔において犬がとるべき姿勢や、その位置を理解しているかなど、高度な熟練度ををはかる為に様々なエクササイズが使用される。

レベル 3 のコースでは、ボーナス^{2.2)}を含む 18~20 個のエクササイズが使用される。

ベテラン – リードなし

ベテランクラスはステーションナリーポジションを制限し、あらゆるレベルの高齢犬に適した、主に動くことに重点を置いたクラス。

ベテランクラスはリード無しで行われる。

コースは高齢犬でも行えるように設計される。

ベテランのコースでは、ボーナス^{2.2)}を含む 11~13 個のエクササイズが使用される。

ベテランでは Down を含むエクササイズは使用されない。

"A"クラス "B"クラス

レベル 1、2、3、ベテランクラスは、"A"クラスと "B"クラスに分割される。

"A"クラスはタイトル(レベル 1、レベル 2、レベル 3、ベテラン)を獲得していない犬のために設けられている。

B クラスはタイトル獲得済の犬が参加出来るクラス。

イントロには A,B の区分はない。

レギュラークラスへの参加資格

レギュラークラスへの参加条件は下記に記載。WRCL イベント参加資格については第 1 章のラリーオビディエンス参加資格を参照。競技会でのタイトル獲得の概要については、第 8 章のタイトル、アワード(表彰)、ランキングに記載。

イントロ - 月齢 6 ヶ月以上の犬であれば参加することが出来る。イントロおよびレベル 1 以上のタイトルを保持する犬は、ウォームアップとしてイントロに参加することは出来るが、表彰の対象には該当しない。

レベル 1 - 月齢 6 ヶ月以上の MIX ブリードを含む全ての犬。

レベル 2 - 1 歳^{2.3)}以上の MIX ブリードを含む全ての犬。レベル 2 タイトルを得るにはレベル 1 タイトルを持っている事が条件。

レベル 3 - 1 歳^{2.3)}以上の MIX ブリードを含む全ての犬。レベル 3 タイトルを得るにはレベル 1、2 タイトルを持っていることが条件。

ベテラン - 下記に該当する MIX ブリードを含む全ての犬。^{2.4)}

犬の重さ	ベテランクラス 適正年齢
41kgまたはそれ以上	6歳
23kg~41kg未満	7歳
23kg未満	8歳

クラスアワード(表彰)

どのクラスも通常行う表彰以外に、別のカテゴリーを追加して表彰することができる。(例えばジュニアハンドラー、パピー、最高齢犬など。)

もし事務局がイントロクラスでパピーに特化した表彰を行いたい場合、そのカテゴリーを追加し表彰を行っても良い。

パピークラスを設ける場合、月齢 12 ヶ月以下であることを推奨する。

セクション 2.2 - 特別クラス

特別クラスは、ノンストップコース、リレー、所有者以外のハンドリング等、レギュラークラスを変化させたノンタイトリングクラス。

運営する事務局は、WRCL にイベント開催日と運営するクラスの詳細を伝える際に、特別クラス開催許可を受け、イベント案内書にも表彰を含む詳細を記載しなければならない。これらの結果は、第 8 章-タイトル、アワード(表彰)、ランキングには含まれない。

セクション 2.3 – トーナメントクラス

WCRL が国内、または国際大会の開催を表明した場合、そのトーナメントルールは WCRL によって発行される。

各地（ローカルレベル）で行われる WCRL イベントを、その予選会とする場合もある。

トーナメントルールで行われてきたシリーズで、そのシリーズに参加した人達の中からベストハンドラーを決めることを目的としている。

脚注:

- 2.1 パピークラスはイントロに変更。イントロへの参加の年齢上限は無し。
- 2.2 ボーナスエクササイズは、第 3 章 – パフォーマンス・ルールのセクション 3.4 に記載されているもの。
コース設計の条件とガイドラインに準拠しており、通常はひとつ上のレベルで実施される課目から選択される。
2 サインは 2 として数える。
ベテランクラスではボーナスでも Down は使用しない。
- 2.3 ジャンプエクササイズが含まれるレベル 2、レベル 3 は、月齢 12 ヶ月以上でなければならない。
- 2.4 ベテランでは、そのクラスに該当するか否かを確認する為に、審査員または大会事務局によって体重測定が行われる場合もある。

第3章 - ルール

この章では、ラリーオビディエンスのコンセプト、一般的なコースとそのエクササイズパフォーマンス(演技)のルール解説をする。
パフォーマンスに対する採点は、クラスレベルとそのコースのシーケンスに応じた基準で行われる。
各エクササイズは第5章から第7章で定義される。

セクション 3.1 - 基本ルール

ハンドラーは、ブリーフィングや見分、競技の出場の際し、いつでも出られる準備をしていなければならない。(決定戦も含む)^{3.1)}
ハンドラーが複数のクラスにエントリーされている場合、

- 出場前に、各クラスの見分を済ませなければならない。
- 複数のクラスにエントリーし、出場順が重なるなどの影響が出る場合、ハンドラーは事前にゲートスチュワード、事務局、または審査員に知らせる義務がある。

会場内では、犬舎やケージからの出し入れ、または制約がない場所を除いては、常に犬にリードを装着しなければならない。

犬に装着がみとめられているものは：

- フラットバックル
- スナップカラー
- リミテッドスリップカラー(例えば マーチンゲール ハーフチョーク)
- 標準ハーネス(犬が引っ張っても締めないバッククリップハーネス)

ネームタグ付首輪の場合、タグが垂れ下がるものであってはならない。チョークチェーン、スリップカラー、スパイク首輪、ジェントルリード、ノーブルハーネス(犬が引っ張った時に引き締めになるハーネス)、首輪とリードが1本で繋がっているもの、メタルリード&首輪の使用は禁止。また電気首輪、スパイク首輪、およびチョークカラーは会場内での装着を認めない。



リング内で使用するリードの長さは6'(1.8m)を超えてはならない。

リング内ではクリッカー、おもちゃ等、パフォーマンスを向上させるための補助道具の所持は認められない。但し、規定に明記されているものは除外。(例：セクション 3.4 に記載されている報酬・エクササイズ#402 のレトリブの道具)

WCRL ポリシーは、競技開催する上で随時改定することが出来る。改正されたポリシーは WCRL のウェブサイトに掲載され、WCRL 公認の大会事務局の要請に応じて閲覧可能とされなければならない。

セクション 3.2 - リングへの入場と退場

チーム(ハンドラーと犬)はリード付きの状態ではリング内へ入場する。リード付きで行うクラスを除き、ハンドラーはリングに入った後にリードをはずし、審査員またはリングスチュワードに渡すか、ブリーフィングで審査員が指定した場所に置く。

チームはスタートサインまで進み、審査員の開始の指示を待つ。ヒールポジションで犬は立った状態、座った状態、または伏せた状態から競技を開始しても良い。

審査員はコースパフォーマンスの前と後(スタートサインの前とフィニッシュサインの後)の動作にも減点を課すことができる。(第4章 - 採点を参照) フィニッシュラインを超えたら、リードを装着した状態でリングを退場しなければならない。

セクション 3.3 - コースパフォーマンス(演技)

ラリーオビディエンスは、ハンドラーと犬が、チームとして自然で、活力に満ち、ハンドラーの指示に対して犬は意欲的に作業することを前提としている。コースには、エクササイズを実行する為の適切なペースを確保するため、(セクション 3.4-標準タイム) 標準タイムが設けられている。

チームは、

- スタート地点へ進み、犬はハンドラーの左側につく。
- ノーマルペース(常歩)でスタートサインを越えた時点からパフォーマンス開始となる。
- コース上のステーションを番号順に進む。
- 審査員の指示なしで、各エクササイズを適切に実行する。
- フィニッシュサインを越えて終了する。

以下は基本ルールとして審査の対象となる。

- 犬はエクササイズの中で特別な要求がない限り、コース上では常にヒールポジションを維持しなければならない。
フィニッシュラインを越えるまでのヒールポジションが、前に出る、遅れる、離れる、ぶつかる、ハンドラーが犬の歩度に合わせるなどは、すべて審査の対象となる。
- フィニッシュラインを越えるまで、犬がハンドラーの指示に対して極度に躊躇する、指示なしに動き出す態度も審査の対象となる。
- コース上は特別な指定がない限り、ノーマルペース(常歩)で行われる。
- ひとつのエクササイズを完結したら次のステーションへ進む。ステーションリーポジションでエクササイズを完結した時は、ご褒美(トリーツ・撫でる)を与えても良い。
- トリーツを与える行為や犬を触って誉める行為は、レギュレーションで許可された場面では全クラスで認められるが、その他のコースパフォーマンス中は認められない。
- ステーションリーポジションで次の動作へ、あるいは次のステーションへ移動するまでの間、犬はその場所での姿勢を維持しなければならない。

- リード付きで行われるクラス(イントロ・レベル 1)では、リードは張ってはならない。リードを持つ手は、片手でも両手でも良い。また、途中で持ち手を変える事もできる。
- 審査員のブリーフィングで特別な指示がない限り、チームはサインの左側を進む。
- 各エクササイズは、サインから半径 1.2 メートル以内で実行されなければならない。(通常サインの前か、サインの左側で行われる場合が多い。)
- 各エクササイズは、特別規定で示されていない限り、リトライ(やりなおし)しても良い。
- ボーナスは成功した際に加点がつくオプションであり、チームはボーナスを実行してもしなくても、どちらでも良い。
- フィニッシュサインを越えた時点でタイムを止め終了となる。またはセクション 4.2 にある失格の場合も競技終了となる。

ルール、詳細については、セクション 3.4 を参照。

セクション 3.4 – コンセプト

ラリーオビディエンスには下記の様々なコンセプトが含まれる。
パフォーマンスと採点の基準は、これらに着目して行われる。
エクササイズが正しく実行されなかった場合の採点については第 4 章を参照。

アダプティングペース(歩度を合わせる)

ハンドラーの全ての歩度、方向変換に対し、犬が遅れる、前に出る、蛇行する、あるいはくっつきすぎて歩行の妨げになるなどの動作に対して、ハンドラーが犬の歩度に合わせて歩くスピードを変える、犬に近づく、または離れるといった行為を意味する。
犬はハンドラーと同調して動くように訓練されなければならない。

アンティシペーション(先読み)

ハンドラーが指示を出す前に、犬が先に命令を察知して姿勢を変えたり動き出す行為を意味する。

ボーナスエクササイズ(加点課目)

コース上に BONUS というプラカードがつけられた加点のつくエクササイズであり、全てのレギュラークラスで使用される。
ボーナスエクササイズはオプションなので、実行しなくても減点の対象にはならない。

- エクササイズが正しく実行された場合の加点を 10 点とし、そうでない場合はその出来映えに応じて採点される。
- ボーナスエクササイズの減点は、10 点を超えてはならない。
- ボーナスのリトライは 1 回。リトライした場合の最大の加点は 7 点となる。(リトライにより 3 点の加点を失う)
リトライしたボーナスエクササイズが正しく実行されなかった場合の減点は、7 点を超えない。
- ボーナスエクササイズを実行した事で、あるいは実行しない事で進行方向が変わった場合、次のステーションへ進むためにハンドラーは必要に応じて追加の基本ターンを実行しなければならない。
- ボーナスをパスする場合、ハンドラーは犬をヒールポジションにキープした状態で次のステーションへ進む。
ボーナスをパスすることに対しての減点はない。

ボーナスエクササイズの実行方法

- レベル 1 は第 6 章に記載されている、遠隔、ジャンプエクササイズを除くレベル 2 エクササイズから選ばれる。(リード付)
- レベル2は第7章に記載されている**300, 302, 308AB, 350,354, 358, 360, 362, 372AB, 374, and 376**から選ばれる。
- レベル 3 は第 7 章に記載されているレベル 3 のボーナスエクササイズから選ばれる。
- イントロは第 5 章に記載されているレベル 1 のコーンエクササイズから選ばれる。
- ベテランは第 7 章に記載されている「Sit」（「Sit」の使用上限を超えている場合）、「Moving Down」を除いたレベル 3 ボーナスエクササイズ、または 350, 364, 366AB, 376 から選ばれる。

キュー(命令・合図・指示など)

エクササイズを実行する上で、ハンドラーは犬にそのエクササイズに必要な動作を伝える手段として、声による、または手や体の動きによる命令・合図・指示を行う。これらは全てキューであり、それぞれを区別しない。

声による合図と手や体の動きによる合図が同時に与えられた場合は 1 つのキューとする。

追加のキューとは、ハンドラーの合図で犬が正しくエクササイズを実行出来なかった場合や、エクササイズの途中で犬が躊躇したり停止した場合に出される余分な合図を言う。また継続的な合図に対して、約 3 秒経過しても犬が正しくエクササイズを実行しない場合も、その合図は追加のキューとみなされる。追加のキュー毎にペナルティーが科せられるが、ベテランクラスでは、ひとつのエクササイズにつき 1 つの追加のキューまではペナルティーはない。

注釈: 「継続した合図」を使用する事は、ラリーオビディエンスでは問題ありません。「Front」の合図として「カム、カム、カム、カム」を言い続ける、また声と連動させてお腹に手をあて続けても、犬がハンドラーの側まで躊躇なく来ることが出来れば、犬がその合図を理解していると解釈できるので減点にはなりません。犬がハンドラーの側に来る途中で躊躇したり完全に静止した場合、継続した合図が出されている状況で止まった犬が自力で動きだしたとしても、その合図の理解が不十分だと解釈されるので、「エクササイズの途中で犬が躊躇したり停止した場合に余分に出される合図」扱いとなり減点の対象となります。

声による「そうそう」「よしよし」「良い子」などの誉める言葉や、ハンドラーの左腿や腰付近をタップし、その位置に居ることが正しいと犬に理解させるようなハンドシグナルで犬を誉めることは認められているので、追加のキューにはならない。

コースマップ

コースマップには、ステーションごとのエクササイズが一連の流れの中で実行されるように表示されている。

コースには順路にそって様々なエクササイズが揃えられている。

コースはハンドラーの技術をはかる目的をかね、第 5 章から第 7 章に記載されているように、レベルに応じたエクササイズが使用される。

そのため、異なるレベル、またはイベントごとに、異なったコースを使用しなければならない。

審査員は各クラスに適応したコースをガイドラインに沿って設計する責任がある。

エクササイズ(課目)

各エクササイズは第 5 章から第 7 章に記述されている通りに実行されなければならない。

エクササイズは大きくわけて二つに分類される

- ステーションナリーエクササイズ

ステーションナリーエクササイズは、停止した状態で終わる課目。またそのエクササイズの一部にムービングエクササイズが含まれることもある。

- ムービングエクササイズ

ムービングエクササイズは、動きながら次のステーションへ進む。そのエクササイズに停止する動作が 1 つ、もしくはそれ以上含まれることもあるが、その場で停止した状態で終わらず次のステーションへと進む。

特定の内容により分類されたエクササイズ

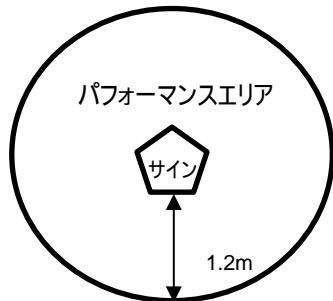
- 犬から離れるエクササイズと、距離のあるエクササイズは、ハンドラーと犬が 1.5m以上離れて行われるエクササイズ。
- ジャンプエクササイズは、障害を使用するエクササイズ。
- コーン/ボウルエクササイズと、オブジェクトエクササイズは、コーン・食器・オブジェ等、犬の気をそらす物を使用するエクササイズ。

これらのエクササイズでは、犬はハンドラーの合図に意欲的に反応することが求められている。
(追加のキューや先読み、躊躇などをせずに実行する。)

各エクササイズの内容は第 5 章から第 7 章に下記の項目を含め記載される。

- 目的。
- 目的を満たすためのプライマリーエレメント。(主要動作)
- セカンダリーエレメント(副要素)及び、それを行う際の犬の態度。(第 4 章-採点に記載)
- エクササイズの要件を理解、解釈するための補助説明。

各エクササイズは、エクササイズサインのパフォーマンスエリア、つまりコースマップで定義されている方向に進んだ時、通常サインの正面または側面のほぼ 1.2m以内で開始される。



Finish-Right(右)と Left(左)

Front で停止した後、ハンドラーの右側から、または左側からヒールポジションへ戻り座る。

- Finish Right、または Right Finish は、犬がハンドラーの右側から後ろを廻ってヒールポジションへ戻り座る動作。
- Finish Left、または Left Finish は、犬がハンドラーの左側*から直接ヒールポジションに戻り座る動作。
(*犬がハンドラーの左側からヒールポジションに戻る動きは、ハンドラーの後ろを廻ることなく、尚且つコンパクトであれば、あらゆる方法が許容される。)

フットプリント(足跡)

ステーションリーポジションで、ハンドラー、または犬の身体によって覆われている部分をいう。(留まっている場所)

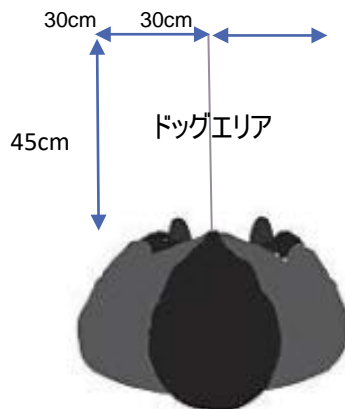
Forward- Right(右)と Left(左)

Front で停止した後、ハンドラーの右側から、または左側からヒールポジションに戻り、そこから停止することなく前へ進む。
ハンドラーは犬がヒールポジションに戻ったら躊躇したり停まることなく前へ進む。

- Forward Right は、犬がハンドラーの右側から後ろを廻ってヒールポジションに戻り、座ることなく次のステーションへ移動する。
- Forward Left は、犬がハンドラーの左側から直接ヒールポジションに戻り、座ることなく次のステーションへ移動する。

Front(正面停座)

ハンドラーの肩のラインに対して垂直に、犬はハンドラーの体の正面に位置する。
犬の頭の位置はハンドラーが伸ばした腕よりも離れていない状態、すなわち地面に平行にハンドラーが腕を前に伸ばした内側に位置する。
ハンドラーの正面から 45 センチ(18") 以内、左右 30 センチ(12") 以内(Dog Area)が目安となる。(犬の頭がハンドラーが腕を前に伸ばしたときに届く位置であるという意味)



犬の Front の位置として示されている Dog Area の外側で Front を行った場合、Front のアウトオブプレイス(第 4 章.セクション 4.3)となり減点となる。

HALT(停止)

ハンドラーは両足を揃えて停まる。犬はそれに反する特定のエクササイズ条件がない限り、ヒールポジションで躊躇することなく座る。
座るときは指示なし、指示あり、どちらでも良い。

ヒーリング(脚側行進)

ヒーリングはステーション間の移動も含め、スタートからフィッシュまでのパフォーマンスの大半をしめる。特別指定がない限り、犬は常にハンドラーの隣に居なければならない。

ヒールの位置から外れた状態、(ハンドラーに)ぶつかる、遅れる、前に出る、左右に大きくズれるなどは減点の対象となる。

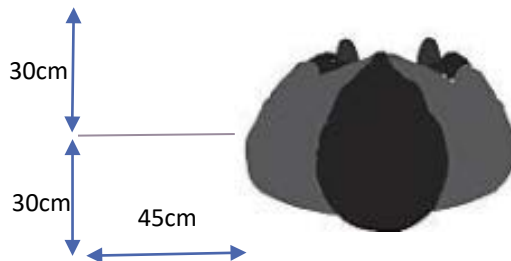
ヒールポジション

ヒールポジションは、ハンドラーが地面と平行に腕を左に伸ばしたところに犬の肩甲骨が位置する。

一般的に犬はハンドラーの左側 45 センチ(18")以内に位置し、その肩甲骨の位置はハンドラーから前後 30 センチ以内(12")。

ヒールポジションは、ヒーリング中、また、ハンドラーが停止した際に犬がヒールポジションにいることを求められている時にも適用される。

犬のヒールポジションの位置として示されている Dog Area の外側でステーションリーポジション(静止姿勢)になった場合、ヒールポジションのアウトオブプレイス(第 4 章.セクション 4.3)となり減点となる。



ハンドラーの右側でのヒーリング(第 7 章、セクション 7.5-レベル 3 ボーナスイクササイズ)の位置も、この図の反転状態と考える。

ユニゾン(息を合わせる)

犬がハンドラーの動作に同調して動くことを意味する。ユニゾンと明記されたエクササイズ実行中(例えばヒーリングや Front など)、犬は継続的にハンドラーに同調して動かなければならない。息が合っていない状態は、ハンドラーと一緒に動き出せない、または、ハンドラーと一緒に停止できないことによって示される。

ジャンプエクササイズ(障害飛越)

ジャンプエクササイズは服従訓練の一部として使用される。障害は犬に危険のないように設置されなければならない。

(安定した状態で設置されている事。軽量で高さ調節可能なバーを装備したもので、角がないものを使用する。)

障害のバーの長さは 1.2m-1.5m の物を使用する。ウイング付きハードルを使用する場合、ウイングの幅は 30cm を超えてはならない。

ジャンプエクササイズは、完全に飛び越える、バーに足が当たる、バーを落すなど、どの状態であっても支柱間を正しい方向から抜けた時点で完了とする。バーを落した場合はリトライ出来ない。^{3.2)}

支柱間をぬけずに障害の横を通り抜けた場合、ハンドラーは犬を呼び戻し再度障害に向かわせる。

ジャンプエクササイズのプライマリーエレメントは、障害の「高さ」ではなく、その支柱間をハンドラーの指示によって犬が正しい方向から通過すること。^{3.2)}

障害の高さは 10cm、20cm、30cm、40cm に分類される。

バーの高さは犬の体高に応じる。

犬の体高	最低の高さ	推奨される高さ
30cmか、それ以下	10	10
40cmか、それ以下	10	20
50cmか、それ以下	20	30
50cm 以上	30	40

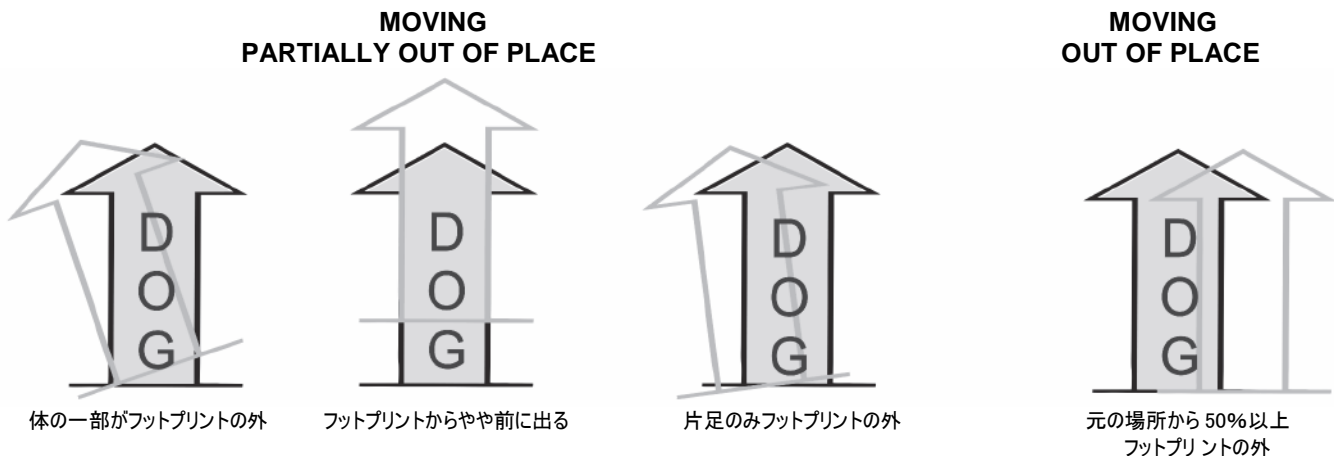
最低の高さは、変更依頼 (Modification Request) 無しで使用を許可された高さ。

ルアー(餌でつる行為)

エクササイズを成功に導くため、ハンドラーが「トリーツ」を持っているかのような動作で誘導する行為を「ルアー」という。実際にトリーツを持っていなくても、ルアー行為となる。

ムーヴィングアウトオブプレイス・ムーヴィングパーシャルアウトオブプレイス(その場から動く・その場から少し動く)

「ムーヴィングアウトオブプレイス」は犬がそれまで留まっていた場所から50%以上動いた場合に起こる。また、それまで留まっていた場所から身体の一部(50%未満)が動いた場合は、「ムーヴィングパーシャルアウトオブプレイス」となる。「ムーヴィングアウトオブプレイス」と「ムーヴィングパーシャルアウトオブプレイス」の減点は、エクササイズでステーションリーポジションが指定された時と Stay が必要条件の時に適用される。



Pace- Normal,Slow,Fast(常歩、緩歩、速歩)

ペースサインはエクササイズを実行するスピードを示す。
ペースサインには「Normal(常歩)」「Slow(緩歩)」「Fast(速歩)」がある。

Normal Pace は自然な歩幅と動き、自然な速さで目的地に到着する状態である。「Slow」「Fast」などの特別な指示がない限り、スタートからフィニッシュまで Normal Pace で行われる。

「Slow Pace」「Fast Pace」の速さは、ハンドラーの Normal Pace のスピードによって変わる。

- Slow Pace は、Normal Pace の半分の速さ。ハンドラーが歩く速度を変える時は、2～3 歩内で移行しなければならない。犬はハンドラーの歩度に合わせる。
- Fast Pace は Normal Pace の二倍の速さ。ハンドラーが歩く速度を変える時は、2～3 歩内で移行しなければならない。犬はハンドラーの歩度に合わせる。

通常、エクササイズは指定がない限り Normal Pace で実行される為、その他のペース変更後に Normal のペースサインを配置する必要はない。通常、エクササイズは Normal Pace での実行と規定されているので、その他のペースに変更後、Normal のペースサインがなくてもチームは次のステーションの 2～3 歩手前で Normal Pace に移行しなければならない。例えば、コース上に 1.「Fast」、2.「Slow」、3 「360°Left Turn」というシーケンスがあった場合、チームはまず Fast Pace を実行し、「Slow」のステーションの 2～3 歩手前から Slow Pace に移行し、「360°Left Turn」のステーションの 2～3 歩手前で Normal Pace に戻して 360°左ターンを実行する。Fast Pace、または Slow Pace サインはジョイント(接合)する事が出来る。つまり、ひとつのステーション、もしくはシェアステーションにくっつけて、次のステーションへ進むペースを示す。

審査員の裁量で、Fast Pace、または Slow Pace サインは、基本的にどのエクササイズにもジョイントする事が出来る。ただし、例外として、エクササイズの最後が Down の場合、及び、イントロ、レベル 1、レベルベテランでのステーションナリーエクササイズにはジョイント出来ない。

例) #156 Moving Sidestep Right と Fast Pace がジョイントされている場合、Moving Sidestep Right を完了してから 2～3 歩で Fast Pace に移行し、次のステーションの 2～3 歩手前で Normal Pace に戻す。

Pivot(その場で回転)

ハンドラーは立ち位置を変えることなく、その場で回転する。Pivot はハンドラーが前後左右に動いてはならない。(フットプリント参照)

プライマリー & セカンダリーエレメント (主要素と副要素)

エクササイズのプライマリーエレメント(主要素)とは、エクササイズの目的となる要素であり、各エクササイズの説明の中で指定されている。プライマリーエレメントの実行の失敗、または誤った実行は、大きなペナルティーをもたらす。

セカンダリーエレメント(副要素)とは、エクササイズの説明の中に含まれた、そのエクササイズを達成する為の関連動作(すなわち実施要領)である。セカンダリーエレメントの減点については、第 4 章-セクション 4.3-エクササイズの減点を参照。

半径

円の中心からその周囲までの長さ。チームが旋回(180°、270°、360°)する時の規準となる円の大きさの半径(60~90cm)は、中心からその周囲(ハンドラーと犬の間の点)までの距離を下記のように測る



Recall(呼び戻し)

ハンドラーの指示により、犬はハンドラーの体の正面に来る。

リトライ

ハンドラーは次のステーションへ進む前であれば、そのエクササイズをリトライしても良い。ジャンプエクササイズの場合、支柱間を正しい方向へ通過せず、バーが落下していない場合はリトライの対象となる。(横をすり抜けた、違う方向から飛んだ、など。) リトライする場合、リトライ前についた減点は削除され、代わりにリトライ減点がつく。(第4章セクション4.4-特別採点法参照)

エクササイズのリトライをする場合、チームは数歩コースを戻り、そこからそのエクササイズサインにアプローチし、エクササイズ全体を実行しなければならない。

シエアステーションのリトライを行うには、チームは数歩コースを戻り、そこからシエアステーションの最初のサインに再度アプローチしなおし、シエアステーション全体を実行しなければならない。(この場合、リトライの減点は3点のみ)

また、ハンドラーは失敗をしたエクササイズだけを数歩手前からリトライする事も出来る。

ハンドラーが上記のように明確な歩数をもってエクササイズやシエアステーションにアプローチしなかった場合、追加のキューとしての減点がつき、リトライ前の減点も削除されない。各エクササイズ、または各シエアステーションのリトライは2回まで。

ご褒美・報酬

報酬を与える主な目的は、犬の意欲を強化することにある。食べ物(例えば「トリーツ」)を使用すること、犬を撫でる行為は、報酬として認められる。

ご褒美を与えるルール

- レベル 1,2,3,ベテランクラスのステーションリーエクササイズが完結した時。ただしシェアステーションを除く。シェアステーションでは、最後に実行するエクササイズがステーションリーポジションで終わる場合のみ。^{3,3)}
- イントロクラスは、ステーションリーポジション毎にご褒美を与えてもよい。ただし 1 エクササイズに対して 2 回まで。シェアステーションのご褒美はシェア動作に対して与えることは出来ない。与えてしまった場合は実質的な減点が発生する。(第 4 章セクション 4.2 参照)
- 次のステーションへ進む前に与える。
- 犬を誘いこむために使うことは禁止。(ルアー行為)
- スタートする前、またフィニッシュラインを超えた後。
- ご褒美を与える(もしくは犬に触れてほめる)ことに時間をかけすぎてはならない。

トリーツをご褒美として使う場合の追加ルール

- トリーツはポケット内にしまわれていなければならない。手にもつ、口に含むことは禁止。
- おやつポーチは使用禁止。

上記ルールが正しく実行されなかった場合、「不適切な褒美」としてペナルティの対象となる。(第 4 章参照)

シェアステーション

ひとつのステーションに、複数のエクササイズサインが置かれているものを、シェアステーション(結婚ステーション)という。

シェアステーションの特徴は、一般的なステーションリーエクササイズ(Sit, Stand, Down, Front)が組合わさり、シェアステーションの最初に行われるエクササイズの完結姿勢と、それに続く次のエクササイズの最初の姿勢が同じ形になる。

例えばエクササイズ#104(HALT, Sit, Down)と#308(Moving Down, Leave Dog)のシェアステーションでは、Down が共有する姿勢となる(ご褒美を与えるルールを参照)。共有する姿勢がシェアエレメントとなる。

#204(47)HALT, Sidestep Right, HALTと#206A-BのHALT, Leave Dog, Call to Heel, Sitでは、#204の最後のHALTと#206A-Bの最初のHALTがシェア動作となる。

シェアステーションのリトライを行うには、チームは数歩コースを戻り、そこからシェアステーションの最初のサインに再度アプローチし、シェアステーション全体を実行しなければならない。(この場合、リトライの減点は 3 点のみ。)

また、ハンドラーは失敗をしたエクササイズだけを数歩手前からリトライする事も出来る。

ハンドラーが上記のように明確な歩数をもってエクササイズやシェアステーションにアプローチしなかった場合、追加のキューとしての減点がつき、リトライ前の減点も削除されない。各シェアステーション、または各エクササイズのリトライは 2 回まで。

ハンドラーは、シェアステーションを別々のエクササイズとして、分けて実行しても良い。シェアステーションのエクササイズを分割して実行する場合、ハンドラーはひとつ目のエクササイズを完結したのち、次のエクササイズを実行するためのチームの姿勢をリセットするため、コースのレイアウトにそって数歩進まなければならない。

別々のエクササイズとして実行した場合、リトライも別々のエクササイズとして実行する(この章のリトライを参照)。

別々のエクササイズとして実行した場合、ハンドラーは各ステーションリーエクササイズの最後にご褒美を与えても良い。

別々のエクササイズとして実行された場合、シェアステーションとしてのリトライは出来ない。

リトライのために位置を直す場合を除き、シェアステーション実行中にハンドラーが立ち位置を調整する行為は、追加のキューとみなし減点の対象となる。

使用して良しとされるシェアステーションは、レベルに応じて変わる。

クラス	最大使用回数	シェアステーションで 使用出来るエクササイズ数	別々にエクササイズを 実行しても良いか
イントロ	1	2	Yes
レベル1	2	2	Yes
レベル2	3	3	Yes
レベル3	3	3	Yes
ベテラン	2	3	Yes

ペースチェンジのサインがシェアステーションの最後のエクササイズサインと組み合わさっている場合 (Joint)、このペースサインは 1 ステーションで使用可能な最大エクササイズ数にはカウントされない。

極度の躊躇

ハンドラーの指示に対して犬が反応するまで、4～5 秒の間があった場合は「極度の躊躇」とみなす。

ステーション

エクササイズサインが置かれている場所を「ステーション」という。

ステイ イン プレイス(その場に留まる), ステイ イン ポジション(その姿勢を維持する)

ステイとは、犬の体の位置、または姿勢が変化しない状態を意味する。規定を明確にするため、ステイにはプレイス(場所)とポジション(姿勢)にて区別される。これらは採点に影響するため、区別して表現されることが重要である。どちらか、または二つとも、エクササイズの主要動作およびその関連動作の記述に使われることがある。

ステイ イン プレイスは、犬の足が地面に設置し、その場から動かない状態を示す。その場から移動した度合いが 50% 以上だった場合は、「アウト オブ プレイス(その場から外れた表現)」となる。移動した度合いが 50% 以下の場合には部分的に評価される。
(度合いの表現はフットプリントを参照)

ステイ イン ポジションは犬の姿勢(例: 座る、立つ、または伏せる)をいう。Sit で待機しなければならない場面から Down、または Down で待機しなければならない場面で Sit など、その体勢を変えてしまうと「アウト オブ ポジション(姿勢を変えた)」となる。
(ステイ イン ポジションはヒールポジションなど、位置関係と混同されてはならない。ヒールポジションはハンドラーとの関係性で生じる位置を示すものである。ヒールポジションを参照)

リードを張る

リードが張るという状態は、犬の首輪にテンションがかかっているという証拠である。リードを張ることで犬の動作に影響を与えた場合、追加のキューとして減点の対象となる。例えば、ハンドラーが Fast Pace に移る際にリードを張り、犬がそこで歩度を変えた場合、リードを張ったことが犬にとっての合図になったということで減点される。

標準タイム(SCT)^{3,4)}とリミットタイム(MCT)

標準タイムは、コースに設置されたエクササイズを実行する上での適切なペースを確保するために設けられている。スコアにはスタートからフィニッシュまでのタイム減点も反映される。

タイムはチームがスタートサインを超えた時点から計りだし、フィニッシュサインで止める。タイムは 1/100 秒単位で計る事が出来る電子タイマー、またはストップウォッチを使用する。

各コースにはリミットタイムが設けられている。リミットタイムを越えた場合は 0 点となる。

レベル 1、2、3 のBクラスには、ハンドラーと犬が自然かつ、活気に満ちた状態で作業するために必要とする時間として、標準タイムが設けられており、標準タイムはリミットタイムよりも 20 秒少ない。AクラスおよびベテランBクラス、およびイントロクラスに標準タイムはない。SCT^{3,4)}を超えた場合、タイムペナルティ^{3,4)}が科される(11 月 13 日__無期限で導入延期) (第 4 章、セクション 4.2-コースペナルティ参照)

各クラスの標準タイム、リミットタイムは以下の通り

クラス	リミットタイム	標準タイム	
		Aクラス	Bクラス
イントロ	3分 (180秒)	設定なし	
レベル1	3分 (180秒)	設定なし	2分40秒 (160秒)
レベル2	3分30秒 (210秒)	設定なし	3分10秒 (190秒)
レベル3	4分 (240秒)	設定なし	3分40秒 (220秒)
ベテラン	4分 (240秒)	設定なし	

標準タイムはエクササイズを進めるスピードを計るものではない。審査員がガイドラインに沿って設計したコース上のエクササイズを進めていく上で、おおよそ必要とされる時間である。

主催者

WCRL の許可を得て、規定に従い競技を開催する個人または団体。

会場

競技会場は主催者によって管理される。会場とはリング以外のクレートエリア、ウォームアップエリア、駐車場、またその他ハンドラーによって使用される場所も含む。

主催者には会場選択の責任があり、その会場がある地区町村の法律に準拠していることを証明する。

見分(けんぶん)

審査員のプリーフィリング後、7分から最大10分間のコース見分時間が設けられる。
コースは審査員によって貼られたコースマップ通り、番号順に課目が設置されている。
見分ルールとしては

- 全クラス、競技開始前に行われる。ただし、止むを得ない状況で見分時間に間に合わないハンドラーについては、審査員の判断で追加の見分時間を設けることがある。
- 20組以上のエントリーがあった場合は、20組ごとに分けて見分を行わなければならない。
- 1回以上の見分時間が設けられる場合、出場順が最初のペアのハンドラーは1回目の見分に入らなければならない。

見分はその競技に出場するハンドラーしか入ってはならない。ただし

- ジュニアハンドラーには親がつくことができる。
- 審査員が必要と許可した場合、障害者ハンドラーにはヘルパーがつくことができる。
- 競技委員は安全確認のため、いつでもリンク内に入ることができる。
- 時間、またはエントリー数に余裕がある場合、大会事務局の判断で競技に出場しない人の見分を許可することがある。^{3.5)}許可を受けた人は見分することが出来るが、競技に出場するハンドラーの見分を妨げてはならない。

脚注:

3.1 そのクラスにタイム、スコアともに同点の犬がいた場合、決定戦を行う。
決定戦は最初の6ステーション、または最後の6ステーションを用いておこなう。
但しトライアルホストの裁量で、決定戦をしなくても良い。

3.2 ジャンプエクササイズを行う前にバーが落下したり、またはコース上で同じ障害が2回使用され、最初のジャンプエクササイズの実行で落下した場合、バーをリセットしてもよい。

3.3 シェアステーションでは最後に実行するエクササイズがステーションリーポジションで終わる場合にご褒美を与える。(例A)
もしシェアステーションの最後がムービングエクササイズの場合、ムービングエクササイズに入る前にステーションリーポジションで、その前のエクササイズが終了するときにも与えても良い。(例B)

例A) #116 (Call Front, Finish Right), #200 (HALT, 180° Right Pivot, HALT), and #204 (HALT, Sidestep Right, HALT)
204の終わりのHALTでご褒美を与える。

例B) #116 (Call Front, Finish Right), #200 (HALT, 180° Right Pivot, HALT), and #216 A (HALT, Leave Dog)では、
216でハンドラーは犬から離れるので、その前の#200の終わりのHALTの状態になった時にご褒美を与えても良い。

3.4 標準タイム(SCT)およびタイムペナルティーは2019年1月1日から有効となるようになっていたが、11月13日の改定書により、無期限での導入延期が決定。
これにより、標準タイムを評価するための追加データを収集する時間を得る。

3.5 参加者以外にコース見分の機会を設けることは、そのスポーツを理解し興味をもって貰うことに繋がる。
その日の時間制約がある場合は、参加者以外の見分は制限する。
また参加者以外の見分許可は、審査員との協議を行う大会事務局が下す。
参加者以外の見分許可は、低いレベルより高いレベルのクラスを優先してはならない。

第4章 - 採点

得点はエクササイズの評価のみならず、スタートからフィニッシュまでのコース全体のパフォーマンスに重点を置き、訓練の質、出来映えをはかる手段として設けられている。

得点の構成要素は下記の3つからなる

- 持ち点(200点)と、ボーナスによる加点。
- 基礎減点は標準タイムからの減点と、コース上でのパフォーマンス全般に適用される。
- エクササイズ減点。

最大点数(200点)から減点されたポイントを差し引いた点数が、そのペアの獲得スコアとなる。点数の高い「ベストタイム」チームがそのクラスの勝者となる。

セクション 4.1 - 持ち点 (Course Value)

スタート時の各ペアの持ち点は200点満点であり、ボーナス加点を足すと最大210点獲得することが可能。

合格点・不合格点

170点以上を獲得したペアには「合格」が与えられる。170点に満たない場合はNQ(不合格)となり、そのクラスの「合格」もつかない。^{4.1)}失格も不合格となる。

セクション 4.2 - 基礎減点

基礎減点は、タイム減点、失格、スタートからフィニッシュまでのパフォーマンス全般に対する減点。

タイム減点(11月13日の改定書により、無期限での導入延期が決定)^{4.2)}

第3章に記述されたレベル1,2,3のBクラスには標準タイム(SCT)^{4.2)}が設けられている。

タイム減点は1秒ごとに1点ずつ減点される。(例:SCT標準タイムより1.38秒オーバーした場合、2点の減点。)

基礎減点

1点減点(1回毎)

- 吠える(1回毎に1点減点だが連続して吠える場合は審査員の裁量により減点数が決まる。)
- ヒーリングの失敗-(ハンドラーに)ぶつかる、遅れる、前に出る、左右に大きくズれるなど。
- ハンドラーにとびつく。
- リードを張る。

2点減点(1回毎)

- ハンドラーが犬のペースに合わせる。(アダプティングペース)
- 追加のキュー。^{4.3)}
- サインを動かす、倒す、またはハンドラーと犬がサインやコーンで離れてしまう。^{4.4)}
- レベル1、イントロクラスでリードを落す。
- ハンドラーが(褒美として)トリーツをあげている時にトリーツを地面に落す。
- ハンドラーがサインより離れてエクササイズを実行する。(半径1.2mを超える)
- ~~コースパフォーマンスの前と後のルアー行為。~~
- 座る場面で伏せるなど、規定の記述にない姿勢をとる。

3点減点(1回毎)

- 部分的に注意力散漫、コントロール不能になる。^{4.5)}

5点減点(1回毎)

- シェアステーションのシェアエレメントに対してご褒美を与える。
(イントロクラスのみ-5点、通常のクラスではNQになる行為。)
但しシェアステーションのエクササイズを別々に実行する場合を除く。

失格-0点

- リミットタイム MCT*を超える。
- ハンドラー自身の棄権の申し出を審査員が承認した場合。
- ヒーリングが成立していない。**

- 不適切、または理解不能な犬の行為。
 - ー 人、犬、物に損害を与えかねない。
 - ー 体調不良を示す。
 - ー 排便・排尿。
 - ー 制御不能(一時的なものを除く)、呼び戻しが利かず時間が経過した場合、ハンドラーは直ちに犬を捕まえなければならない。

- コースパフォーマンス中のルアーリングや犬への不適切な褒美。またはオモチャを与える。**

- コースから外れる。**
 - ー エクササイズをとばす。(ボーナスを除く)
 - ー エクササイズの構成に必要なシーケンス(順路)をとばす。

- スポーツマンシップの欠如。***
 - ー 犬に体罰をあたえる。(声を荒げる、または口頭で圧力をかける。)
 - ー 敷地内での破壊行為。
 - ー リードによる強制。
 - ー 審査員、大会事務局に対する無作法な行為。

- 課目を実行する際に犬に触れる。
- セクション 3.1 に記載された首輪や訓練補助道具を使用。

*競技要員により失格がつけられる。タイム要員はリミットを越えた場合、審査員に合図をおくっても良い。

**審査員により失格がつけられる。

***リング外への退場勧告。

セクション 4.3 - エクササイズの減点

第5章-7 課目の記述とおりにエクササイズが実行されなかった場合、審査員はそのエクササイズに対しての減点を行う。減点はそのエクササイズの質の向上を示すものである。各エクササイズについては最大 10 点までペナルティーを科せられる。

プライマリーエレメントの減点 - エクササイズのプライマリーエレメントを規定通りに実行出来なかった場合、エクササイズの失敗を意味し、以下のペナルティーが科せられる。失敗したエクササイズはリトライ(やりなおし)^{4.6)}することが出来る。

5点減点(1回毎)

- プライマリーエレメントの失敗

セカンダリーエレメントの減点 - (セカンダリーエレメントとは、エクササイズの説明の中に含まれた、そのエクササイズを達成するための関連動作を示す。)

エクササイズのプライマリーエレメント以外を規定通りに実行出来なかった場合、以下のペナルティーが科せられる。プライマリーエレメントの出来映えについても評価される。

エクササイズ全体のリトライ(やりなおし)は認められている。

1点減点(1回毎)

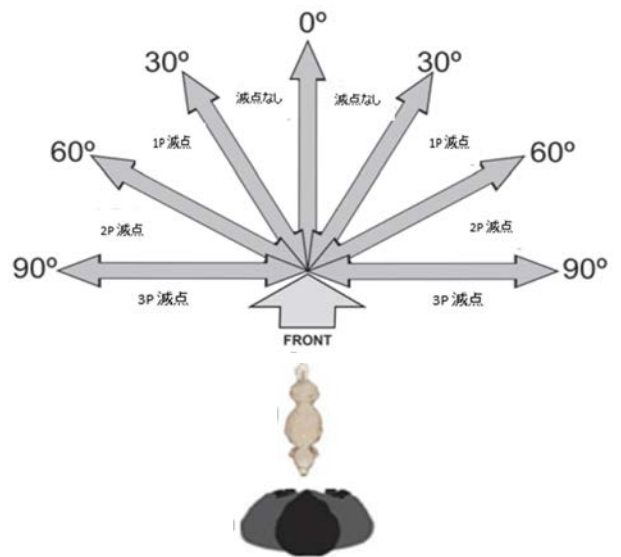
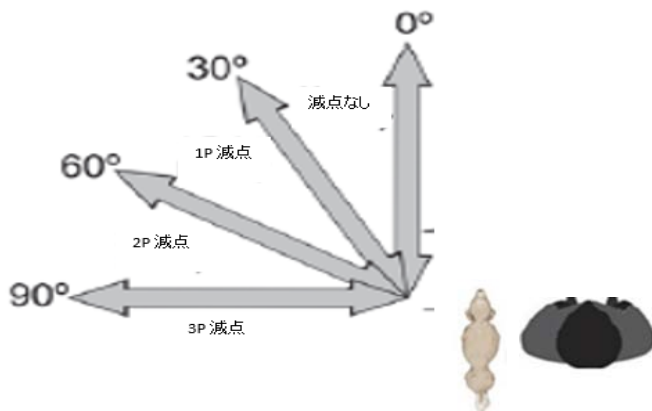
- Sit、Stand、Down、または Front の向きが斜め。(30°毎に1点減点)
- ハンドラーの動きに同調していない。
- ステーションリーポジションになった時にヒールポジション、またはフロントポジションの Dog Area から外れている。
ステーションリーポジションになった後に少し動く。
- 極度の躊躇、または先読みによるフライング行動。
-

2点減点(1回毎)

- 犬、またはハンドラーが、セカンダリーエレメントを記述通りに実行しなかった。
- ステーションリーポジションになった後の、50%以上のズレ。

3点減点(1回毎)

- エクササイズ、またはシェアステーションのリトライ。(やり直し)^{4.6)}



セクション 4.4—採点の特別考慮

一般的に状況が具体的に規定で言及されていない部分については、審査員の判断によって減点される点数が決められる。審査員はコース上のパフォーマンス全体の出来映えを考慮する。

Double Jeopardy 重複失敗の採点

1つの動作や振る舞いに対して、2つ、あるいはそれ以上の減点がつくという状況であった場合、それぞれの減点を加算するのではなく、そのうちのいずれかを適用する。

例をあげると:

- ヒーリングにおいて、ハンドラーが追加のキューを与え(2点減点)、犬に歩度を合わせた(2点減点)場合、ヒーリング全体に対しての減点を2点とする。(4点ではなく全体の出来映えに対して減点を行う。)
- エクササイズ #100 (HALT, Sit)において Sit の位置が 30°~60°斜め(1点減点)、そしてその座った位置がハンドラーから離れており、セカンダリーエレメントが記述通りに実行されなかった(2点減点)。この場合エクササイズ #100 に対しての減点は2点とする。
- エクササイズ #104 (HALT, Sit, Down)において、Sit の位置が 30°~60°斜め、そしてそこからの Down も斜めになる。この場合、Sit の位置が Down の位置に影響しているため、最初の Sit に対してのみ減点(1点)を行う。2点減点にはしない

シェアステーションについては、シェアする動作についての減点は1回のみとする。ただしハンドラーがシェアステーションを分けて行う場合はこの対象にならない。

Penalties Not Erase with a Retry リトライ(やりなおし)で消えない減点

通常、エクササイズをリトライする場合、3点の減点がつき、リトライ前についた減点は一旦消去されるが、下記の行為・行動についた減点はリトライしても消えない。

- 吠える、ハンドラーに飛びつく、一時的に注意力散漫、コントロール不能になる。
- サインの逆側で、あるいは犬とハンドラーがサインを挟んでエクササイズを実行、リードを落す、ご褒美のトリーツを落とす、サインから 1.2m以上間隔をあけてのエクササイズの実行。
- 失格。
- 外部の(人の)補助行為。

Outside Assistance 外部の(人の)補助行為

外部の補助行為とは、リング外の人々が競技者のパフォーマンスに影響を与えること。審査員はその補助行為が競技者のパフォーマンスにどの程度の影響を与えたか、採点の対象となる場面であるなしに関わらず判断する。(例: 補助行為によって減点を免れる) エクササイズのプライマリーエレメントが実行されなかった場合は、外部の補助がなかったとしても減点は付く。

例をあげると:

- ハンドラーがエクササイズ 114 (Halt, Sit, Down, Walk Around)において、Down をやり忘れ、そのことに気づかず次のステーションへ向かう際に観客がそのエラーを指摘。もしハンドラーがやり直しを決定した場合、審査員はハンドラーのやり直しがハンドラー自身によるものか、外部からの指摘によるものかを判断しなければならない。通常のリトライであれば3点減点、外部の補助がなければ、リトライをせず次のエクササイズに進んだと判断した場合は、エクササイズのプライマリーエレメントが正しく実行されなかったとして減点が5点になる。
- ハンドラーがコースを見失い立ち止まった時に、外部の人達が次のエクササイズを教える。審査員はハンドラーがそれらの補助によって再開したか否かを判断する。補助があったと判断した場合は失格となる。

脚注:

- 4.1 170点以下の得点は記録として残す。但し失格の対象になるケースはそのスコアが0点となる。
- 4.2 標準タイム(SCT)およびタイムペナルティーは2019年1月1日から有効となる。
- 4.3 ベテランクラスでは、1つのエクササイズにつき1回までの追加のキューにペナルティーはつかない。
- 4.4 ハンドラーと犬がサインやコーンを跨いで通過してしまった場合、分裂(splitting)となる。
- 4.5 部分的に注意力散漫、あるいはコントロール不能になった場合、ハンドラーはすぐに犬を掌握しなければならない。
例: 激しく吠える、激しくハンドラーに飛びつく、コースから離れる、リング枠を壊す。
指符または声符によって犬が極度に躊躇することなく再開することが出来れば、部分的な注意力散漫、コントロール不能として3点減点となる。
- 4.6 エクササイズ、またはシェアステーションをリトライした場合、リトライ前についた減点は一旦削除され、リトライに対して3点減点がつく。